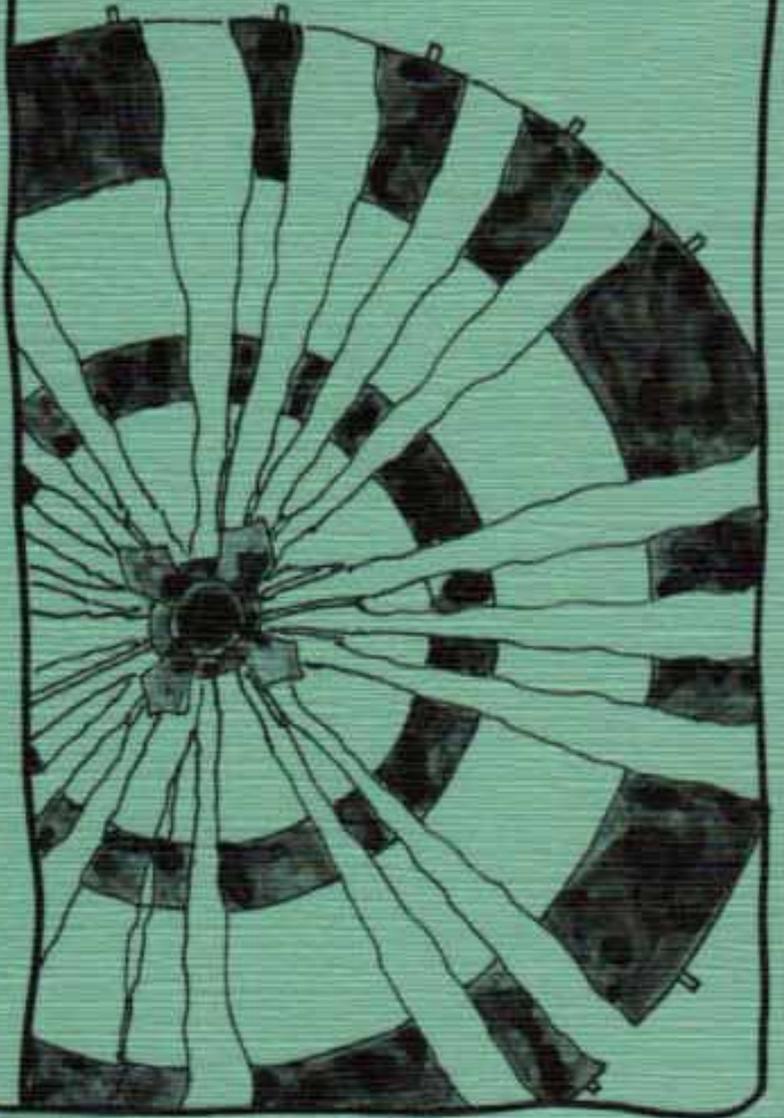


やぶれ傘



一三〇号
二〇一三年二月

十二まで数へてふくら雀田に 根橋宏次
 春近しそろりと曲る教習車 大島英昭
 葉つばよりひからびてゆく干大根 きくちきみえ
 回りゐるパーポール口脚伸ぶ 丑久保 勲
 立ち食ひのうどんへ刻み葱山と 青谷小枝
 梅咲いて天神様の絵馬に風 廣瀬雅男
 ビチカート聞こゆる寒の星月夜 藤井美晴
 寒鯉に手を振つてゐる女の子 小山よる
 戸を開けて横向きに見る冬の土手 白石正躬
 暫くはもぐらずにゐる鳩 瀬島酒望
 薄水の水脈に揺れゐる舟溜まり 秋山信行
 浮玉の積まれし舟屋野水仙 天野美登里
 寒の雨煉瓦の駅は午後三時 安藤久美子
 どの道もきれいにされてゐる二日 渡邊孝彦
 鯖酒や放蕩ごころをんなにも 有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎

羊羹のひとくちサイズ春隣 小泉里香
 年賀状のみの消息四十年 高橋 均
 久々の墨の香を聞き書く賀状 貫井照子
 草虱付けて温泉脱衣場 野口希代志
 にこりともせず大根を置いていき 広瀬 濟
 万両のひそかに赤し庭の隅 箕田健生
 水浅き用水歩く二羽の鴨 森 美佐子
 見渡せる冬田の向う筑波山 山本久枝
 鳥居まで丁石続く冬椿 湯本正友
 七草の程良きかをり今日も晴 吉田幸恵
 五分だけ立ち寄る孫にお年玉 伊藤 薫
 野良猫のふくらんで来る寒き朝 奥田温子
 寒に入るピアノの上の置時計 木村瑞枝
 コート着てシヨパン弾きをり駅ピアノ 倉澤節子
 神の留守にわか庭師の高梯子 黒澤次郎

数減らし丁寧に書く年賀状
日当たりを猫と分け合ひ日向ぼこ
椿の葉一枚毎に冬日差
帰宅時の把手冷たし妻の留守
家震はせて奥能登の冬の雷
城囲む濠に降り立つ鴨の群
雪山を遠くに望み富山湾

小池一司

小泉里香

イヤホンの右ばかりとれ小六月
山茶花の道行く市営路線バス
工場の屋根に湯気立つ寒の星
ふるさとは雪との機内アナウンス
落ち葉踏み日当たりの良きベンチまで
味噌汁をよそへば雪のしづる音
羊羹のひとくちサイイズ春隣

小巻若菜

友と会ひ遅いランチを冬うらら
大根をゆつくりと煮る日暮れくる
冬晴れて洗濯籠を空にする
店じまひする眼鏡屋に寄る師走
自転車を停めて柚子売る人のあり
コトコトと小豆を煮つつ賀状書く
戸を開けて筑波山を望む年はじめ

坂本和穂

田沢湖の水は紺色冬近し
庭隅の日陰の鉢の菊は了はる
武家屋敷雪つり並ぶ塀のなか
冬紅葉庭に句碑ある武家屋敷
冬の月ブナの林に露天風呂
寒木に鹿の歯の痕奥秩父
賑々しく園児ら歌ふクリスマス

小屋のリス胡桃を銜へ冬日向
舟あかり冬霞より現はるる
弓型の波が次つぎ冬の湾
階段に「おつかれ様」と石露の花
一面の落葉で遊ぶ園児達
いつもより数へて多し除夜の星
浅草寺と仲見世を入れ初写真

佐藤稲子

師を見舞へば涙のみの瞳薄紅葉
早暁の霧の立ちゐる田んぼ道
蜜柑山の入江は奥へ佐田岬
退院す石路一輪に迎へられ
山原さんぼるの芋じゆうしいに子もだまる
声出し合ひ担ぎて運ぶ甘藷刈
病棟の未明の廊下虎落笛

眞田忠雄

ぎんなんを炒る音頻りなることも
初冬の雨が郵便夫を濡らす
「進化図」に人間ひとり十二月
空つ風籠原深谷神保原
数へ日の四日の月を一瞥す
病室の窓わづか開き大旦
元日の展望鏡に伊豆半島

柴崎和男

星ひとつ又もうひとつ冬の月
鮫鱧鍋君から先に喰ひたまへ
賀状書く喪中はがきの届く日々
単調な日のくりかへし暦果つ
道端に吹き寄せられてゐる落葉
年賀状のみの消息四十年
背に挿した破魔矢の鈴がりんと鳴り

高橋均

高橋宜治

初氷池端に立つ石灯籠
包丁の音のせはしき師走かな
着膨れて動きの取れぬラッシュかな
我が影が足元にある冬の月
友からの「今年最後」の賀状増ゆ
ゆるゆると歩きながらの梅見かな
酔ひ覚めの首をすぼめる余寒かな

竹内文夫

亡き母の家計簿のメモ読む小春
冬銀河欠けたる奥歯放り投ぐ
鯛焼きを縦半分は妻と分く
ビル群の先に山なみ冬茜
磨硝子に見慣れぬ光冬満月
やや長くもの思ふ風呂十二月
年の暮さしたる支度無きままに

中島和子

終の花こぼれぬる駐車場
畝のやうな父の硯や年新た
亀の車に釣り具こまごま始め
自転詣しづかに混んで来たりけり
松過ぎて柱に残る釘の穴
大根の下半分の辛味買ふ

貫井照子

門柱に五寸蠟螂身じろがず
きりもなき櫛落葉のけふもまた
久々の墨の香を聞き書く賀状
あそぼうねクレヨン文字の賀状来て
浜に立つ白木の鳥居初日の出
京に来て檜のほふ冬至風呂
これ以上をれば焦げさう日向ぼこ

野口希代志

小春日の「夕焼小焼け」バス降りる
柿落葉いち枚浮かぶ露天風呂
草虱付けて温泉脱衣場
黄葉の上には聳ゆる電波塔
熱めの湯にどっぷり浸かる二日かな
ため池の水面すれすれ冬蜻蛉
冬夕焼飛行機雲のちぎれをり

萩原溪人

レーズンをつまみにワイン冬の月
そこここに咲きあゐる冬の麒麟草
雪吊りの支柱は高く苑広し
荒畑の高みにひよいと鼬立つ
海峡を行き交ふ灯りふぐを食ぶ
水門を開けたるまに初日の出
病院の庭によつきり花アロエ

萩原久代

煤逃げの地元温泉混んでをり
掘ごたつおのづと席が決まりけり
干し竿から湯気がでてゐる冬の朝
静かなる一人の刻の柚子湯かな
鏡餅年々小さくなつてゐる
玄関の活花の色淑気満つ
来日の友をもてなす節料理

橋本美代

終焉の近き義妹よ師走来る
冬晴れて西の山脈青黒し
墓地の花啄まれをり冬の昼
脚力の弱まりを知る十二月
掻き傷にピリリと柚子の汁沁みる
元日の街歩き初め四千歩
ぽつぽつと賀状が届き四日過ぐ

濱野 新

冬空に飛行機雲が伸びて行く
晴れた日の寒紅梅に出会ひけり
木の陰を残して霜が解けてゐる
友の賀状文字の乱れが気がかりに
松飾りどんと積み上げどんと焼き
着ぶくれの兄貴とビデオ通話する
夕食に子持ちの鱈の煮付け食ふ

広瀬 濟

眠る子は手に団栗を握りしめ
今年また番の小鳥庭の木に
千歳飴引きずり歩く袴の子
小声にて小さき熊手求めけり
にこりともせず大根を置いていき
唐揚げの匂ふ車内や十二月
てんでんに舌出してゐる寒蜆

増田 裕司

今気付くいつもの道の帰り花
伸びをする小春日和の庭の猫
残りたる衣被入れ今朝の汁
改めて干支の本読む去年今年
職退きて七回となる初詣
墓さうぢ供へし小さき鏡餅
幼子は札より小銭お年玉

道林はる子

研ぐ米の水の冷たき一葉忌
実のやうに枝々にをり寒雀
御無沙汰の電話をかける日向ぼ
オートバイ除けて掴まる茶花垣
冬の霧かもめは空で鳴き交し
雑踏のなかで見上げる冬の虹
バスに乗る咳止めの飴たしかめて

◇3月・4月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
3月	1日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン2	秋山 信行
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島 英昭
	18日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井 美晴
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬 雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
4月	3日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン1	丑久保 勲
	4日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	4日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島 英昭
	7日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	15日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井 美晴
	16日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	WEP俳句教室	丑久保 勲
	22日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬 雅男
	22日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

4月16日(日)の吟行。

集合 10時、日本橋三越ライオン像前。

吟行地 日本橋・人形町界隈を散策。

句会場 WEP俳句教室。

都営新宿線「浜町駅」より「新宿3丁目駅」へ移動。WEPへ。

◎連絡先 秋山 信行 ☎048-874-0555 藤井 美晴 ☎0422-55-2733
 大島 英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬 雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

目寒冬一暖冬ゴ
 をいの輪房日ム
 とち日車のを和ホ
 ぢごの御強くガ一
 て表時をのラスス
 ゐるもをのかケ一
 だけ裏忙のべせ一本
 のもがてての中走
 のこと真ぬ動一人ま
 冬赤古き出か冬
 籠つ時計すなも道

武藤節子

冬万「シひ山南
 う両「カキャンさ茶瓜
 らのルンメシしぶの煮
 らひン「パぶりのの
 雲そ「のまの銀ほ
 一かの歌まの座にか
 つに声あは道のか香
 ない赤妖し乾杯紅
 青庭し七杯新葉散
 い庭の七日新年の
 空隅の夜の会る脇

箕田健生